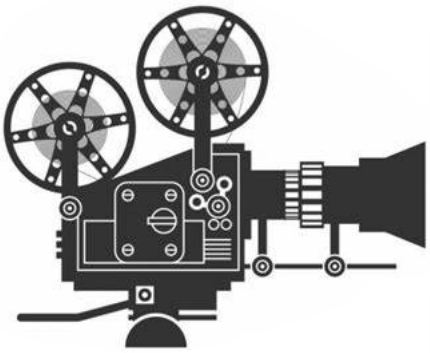


いにしえの映画つれづれ⑪
「代役列伝（3）」

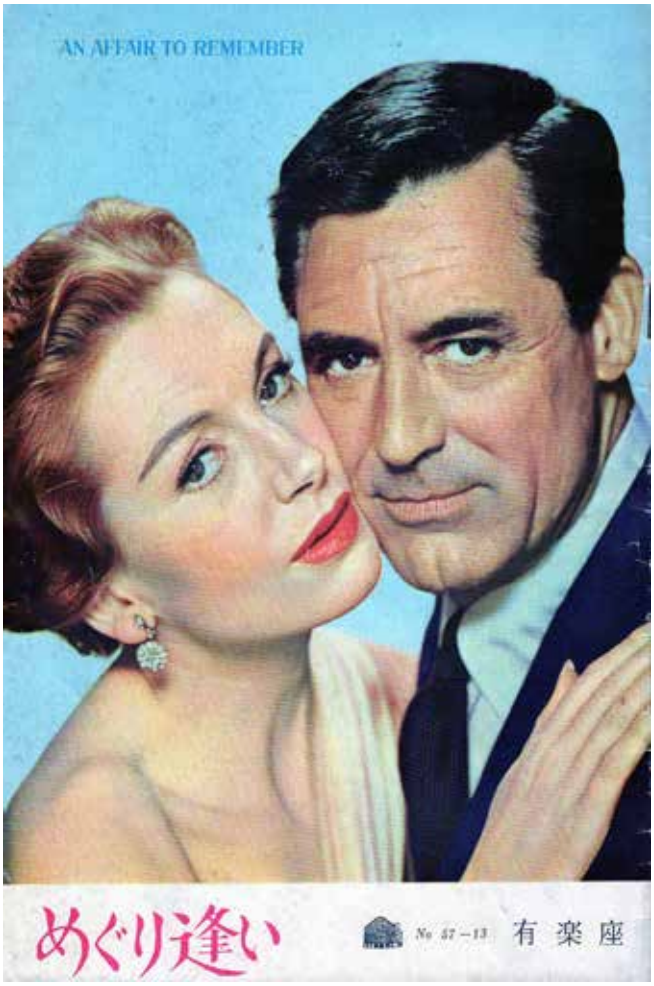
千葉豹一郎

日本で最も愛された海外女優といえば、オードリー・ヘプバーンだろう。

「ローマの休日」(53)で彗星のごとく現れたオードリーはアカデミー主演賞に輝き、映画女優の概念を変えたとまで称賛された。彼女の劇的な登場に特に歓喜したのが日本で、ほぼ引退状態となってからも人気投票の一位を保ち続けた。亡くなって30年以上経った今も、生前の彼女を知らない世代にまで愛され神格化されている稀有な存在である。

ヘプバーンの「ローマの休日」(53)も日本で最も愛された外画のひとつで、たびたびリバイバルされてヒットし、テレビでも繰り返し放映されている。しかし、最初はエリザベス・テイラーと新聞記者役にはケーリー・グラントが予定され、元々の企画者だったフランク・キャプラが監督、制作をするはずだった。しかし、予算の関係やグラントが拒否したことなどで断念し、その後にキャプラに代わってウィリアム・ワイラーが監督と制作を担うことになった。ワイラーが最初に起用を検討したジーン・シモンズは、オードリーと同い年でタイプも似ていたので的を射た選択だった。しかし、シモンズと専属契約を結んでいたRKOを買収した大富豪ハワード・ヒューズが、貸し出しを断ったため実現しなかった。グラントに代わって交渉されたグレゴリー・ペックも最初は出演を渋っていたが、ワイラーの説得でキャストイン。ただ、ペックの高額なギャラが発生したことから、主役はギャラのかさまない新人を発掘することになり、カラー作品にすることもあきらめざるを得なかった。ハリウッドの紳士と呼ばれたペックや同僚役のエディ・アルバートらとの息もぴったりで、撮影は和気あいあいのうちに進み、新人のオードリーはのびのびと大役を演じることができた。こうしたさまざまな要因がいい方向に作用し、オードリーという大器の誕生につながったのは怪我の功名だった。

大フィーバーを巻き起こした「ローマの休日」(53)



すれ違いメロドラマの代表的一本「めぐり逢い」(57)

彼女の次回作「麗しのサブリナ」(54)も、グラントが直前になって断りハンフリー・ボガートが演じた。そのため、大幅な脚本の変更を余儀なくされたうえ、ボガートと共演のウィリアム・ホールデンが不仲で「ローマ」のようにはいかなかった。一方、オードリーとホールデンは親しくなり、互いに結婚を意識するまでになった。諸般の事情で成就はしなかったものの、ホールデンの彼女への思慕は変わることなく「パリで一緒に」(64)でも再共演している。「麗し」は大ヒットし、オードリーが劇中で着たサブリナパンツや髪型はブームを巻き起こして、ファッションリーダーとしての地位も確立してゆく。そのオードリーが出演を断った作品が、「アンネの日記」(59)と「六番目の幸福」(58)である。ヒロインと同じような体験をしたのでつらくて演じられない、と「アンネ」を断ったことは割と有名だが、後者についてはほとんど知られていない。「アンネ」は新人のミリー・パーキンス、「六番目」はイングリッド・バーグマンが演じた。「六番目」は第二次大戦中の中国を舞台にした2時間半余りの大作ながら、何とも冗長な映画で、役どころもオードリー向きではなく断って正解だったといえよう。

1930年代から活躍し人気を得ていたグラントは当時スランプに陥り、半ば引退状態だった。薬物依存や精神錯乱で「アニーよ銃をとれ」(50)を途中降板させられ、やはりスランプ状態だったジュディ・ガーランドが見事復活を遂げた「スター誕生」(54)も断り、ジェームス・メースンが演じている。ちなみに、ガーランドが出演した「イースター・パレード」(50)は撮影中にジーン・ケリーのケガで引退していたフレッド・アステアが代わり、大ヒットでカムバックしている。グラントも、「断崖」(41)「汚名」(47)で組んだヒッチコックに請われた「泥棒成金」(54)でカムバック。以後、「旅情」(55)で人気沸騰したロッサノ・ブラッツイとスーザン・ヘイワードが予定されていた、レオ・マッケリー監督が自身の「邂逅」(39)をカラーでリメイクした「めぐり逢い」(57)でデボラ・カーと共演した他、メロドラマやロマンティック・コメディ等で60年代半ばまで出演を続けた。着こなしの良い誰もがなりたい素敵なロマンスグレイぶりは他の追従を許さず、同世代のスターの中ではイメージを保ち続けて息長く活躍した。オードリーとは「シャレード」(63)で共演が実現したが、「マイ・フェア・レディ」(64)は舞台で演じたレックス・ハリソンを推して辞退。ピーター・オトゥールとの交渉が不調に終わり、ロック・ハドスン、ローレンス・オリヴィエも検討され、結局ハリスンに落ち着いた。スタンリー・ホロウェイの演じたドゥーリトル役もジェームス・キャグニーに最初に持ち込まれ興味は示したものの、既に引退していたために

「ソロモンとシバの女王」(59)のブリンナーとジーナ・ロロブリジーダ。ブリンナーの方が適役だという評論家もいて、パワーがお気の毒だ。

「パットン大戦車軍団」(70)。スコットが誰もが欲しがるアカデミー賞を蹴って大物議を醸した・・・。

固辞した。肝心のイライザ役も舞台のジュリー・アンドリュースが候補だったが、映画出演の経験もないのにスクリーンテストを拒否。最初は難色を示していたオードリーも、断ればエリザベス・テイラーに回ると判って承諾した。その結果、予定されていた「卑怯者の勲章」(64)とフレッド・ジンネマン監督の「ハワイ」(66)に出演できなくなり、双方ともアンドリュースに回って「ハワイ」の監督もジョージ・ロイ・ヒルに変更された。アンドリュースの代表作となった「サウンド・オブ・ミュージック」(65)も、最初はドリス・デイ主演、ウィリアム・ワイラー監督と発表されていた。

一方、深刻なのは病気やケガ、あるいは死亡による途中交代で、制作中止に追い込まれた例もある。

一番悲惨な例が、タイロン・パワーの70mmスペクタクル「ソロモンとシバの女王」(59)だ。パワーは戦前から20世紀フォックスのトップスタートとして絶大な人気を誇り、その美貌から二枚目の代名詞のようにさえいわれていた。本人は舞台での演技を評価されることを望んでいたが、二枚目の宿命で大根役者という評価が付きまとった。戦後はグレゴリー・ペックにとって代わられてフォックスも離れ、作品にも恵まれなかった。しかし、ジョン・フォードの「長い灰色の線」(55)あたりから見違えるように上手くなり、「愛情物語」(56)の大ヒットで人気を取り戻した。アガサ・クリスティの「情婦」(57)の好演も高く評価され、今後が期待された。ところが、マドリッドで「ソロモン」の撮影中、剣戟シーンを撮り終えた直後にスタジオ内で急死！既に7割ほどを撮り終え、解体されたセットも多かった。監督のキング・ヴィダーは「パワーの死で、この映画も不必要で無価値なものになった」と嘆いたが、急遽ユル・ブリンナーを代役に立てて映画を完成させた。

「アンナとシャム王」(46)のミュージカル・リメイク「王様と私」(56)でブレイクしたブリンナーは、「アンナ」で王様を演じたレックス・ハリスンが断って回った代役だった。

“偶然の名画”「カサブランカ」(42)。
ボガートとバーグマンでなかったなら・・・。

ゲーリー・クーパーの死去で、ユニヴァーサルのドル箱スター、ジェフ・チャンドラーが代わった「陽動作戦」(61)では、フィリピンで撮影中にチャンドラーが落馬事故で大ケガ。何とかクランクアップし、帰国後に再手術をするも悪化して死亡した。医療ミスともいわれるが、パワーより2歳若い43歳の無念の死だった。クーパーはシネラマ大作、オールスターの「西部開拓史」(62)にも出演する予定だった。

日本でも石原裕次郎のケガで「激流に生きる男」(62)の代役に立った赤木圭一郎が、撮影所で休憩中にゴーカートの運転を誤って事故死し、新人の高橋英樹が初主演を務めた。赤木は“和製ジェームス・ディーン”と呼ばれて伝説化されているが、これらは代役にまつわる不幸な事例といえる。

マリリン・モンローの「女房は生きていた」(63)は、撮影中に病気を理由に休んでいたモンローがケネディ大統領の誕生祝いに出席したために、20世紀フォックスが契約解除。リー・レミックを代役に立てたが、今度は相手役のディーン・マーティンが共演者を選べるとの契約条項があったことから、彼女では集客が見込めないと出演拒否して制作中止となり訴訟に発展した。やがて和解が成立し、モンロー主演で再開されることになった。しかし、モンローの急死で、ドリス・デイと元々予定されていたジェームス・ガーナーに代わり監督もジョージ・キューカーからマイケル・ゴードンに交代して63年に完成した。

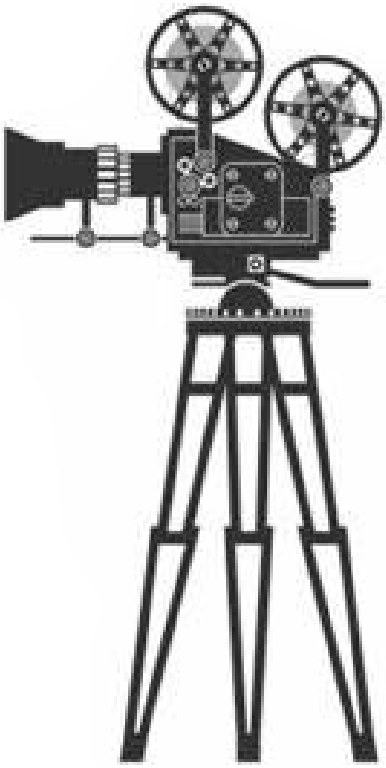
シャーリー・マクレーンの実弟ウォーレン・ベイティ（当時はビーティと表記されていた)はデビュー作の「草原の輝き」(61)で一躍注目され、若手スターとしてその将来を有望視された。制作、主演の「俺たちに明日はない」(67)が大成功し、やはり、企画、制作、主演に脚本と監督も兼ねた「レッズ」(81)でアカデミー監督賞を得て確固たる地位を築いた。しかし、当初から共演女優をはじめとしたあまたの有名女優と浮名を流し、あまり評判がよくなかった。ケネディ

大統領の第二次大戦時の武勇伝「魚雷艇109」(63)は、ケネディの意向で民主党支持のベイティが演じるはずだった。しかし、役柄の解釈を混乱しているとの会社の判断でクリフ・ロバートソンが代わり、監督も「西部戦線異状なし」(30)の名匠ルイス・マイルストンからB級映画専門のレスリー・H・マーティンソンに変更された。おそらく、悪評が響いたのだろう。ベイティは、出演もしたウッディ・アレンがベイティを念頭に脚本を書いたといわれる「何かいいことないかな子猫ちゃん」(65)を、当時付き合っていたレスリー・キャロンとの共演を拒否されたために断り、ピーター・オトゥールが演じた。この他にも、「スティング」(73)「追憶」(73)「華麗なるギャツビー」(76)も断り、3本ともロバート・レッドフォードに回り代表作となった。「明日に向かって撃て！」(69)もマーロン・ブランド、スティーブ・マックィーンと回ってレッドフォードが演じた。一方、レッドフォードが断った作品には「ローズマリーの赤ちゃん」(68)「ある愛の詩」(70)があり、ジョン・カサベテス、ライアン・オニールがそれぞれ演じた。ジャック・ニコルスンらと起用が検討された「ジャッカルの日」(73)は、ヨーロッパ人にしたいとういフレッド・ジンネマン監督の希望で、デヴィッド・マッカラム、イアン・リチャードソン、マイケル・ヨークらが候補になりエドワード・フォックスが演じた。ジョージ・C・スコットがその演技を絶賛されながらアカデミー主演賞の受賞拒否が物議を醸した「パットン大戦車軍団」(70)も、バート・ランカスター、リー・マーヴィン、ジョン・ウェインらが検討さていた。それまでにも何度か映画化が企画され、50年代にスペンサー・トレイシーで具体化しかけたことがあった。

「ゴッドファーザー」(72)も当初はフランク・シナトラ、オットー・プレミンジャーの監督で話が進んでいたが、シナトラが断ってプレミンジャーも降りてしまい、イタリア人のロッサノ・ブラッツイにも断られ、マーロン・ブランドとフランシス・フォード・コッポラの監督で大成功を収めた。

コッポラの「地獄の黙示録」(79)のウィラード大佐役もスティーブ・マックィーン、アル・パシーノらに断られ、ハーヴェイ・カイテルに決定。ところが、途中で首になりマーチン・シーンが代わった。マックィーンは3週間の撮影で当時としては法外な600万ドルのギャラを要求し、人気ドラマにちなんで“600万ドルの男”と揶揄された。「エクソシスト」(73)の母親役もジェーン・フォンダが断って、エレイン・バースティンが演じた。こうしてみると多くの名作、ヒット作が当初とは違う顔ぶれになっていて、企画段階でボツになった作品も数知れず、極言すれば映画は運命の、あるいは偶然の産物なのかもしれない。

最後に”偶然の名画“の代表格といえば「カサブランカ」(42)。本項（1）で述べたように、最初からハンフリー・ボガートとイングリッド・バーグマンではなかった。何とロナルド・レーガン元大統領とアン・シェリダンが予定されていた。レーガンはポール・ヘンリードの演じたラズロ役も検討されたといわれるが、シェリダンはヘディ・ラマールに代わった。撮影中もトラブル続きで、関係者の誰もが後世に残る作品になるとは思っていなかった。バーグマンは後年までむしろ失敗作と見ていた。晩年、久々に観たバーグマンはこういった。「こんなにいい映画だったんですね」。



■次号予告■

次回は世界中に大センセーションを巻き起こした問題作「暴力教室」(55)。

どうぞ、お楽しみに！

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録（電子版）」(ユニワールド)「猫と映画人（電子版）」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。